



Title	桜が散ること : 古今集桜歌の漢詩文基盤
Author(s)	滝川, 幸司
Citation	詞林. 1992, 12, p. 1-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67323
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

桜が散ること

——十人集桜歌の漢詩文基盤——

一

桜が散るとはどういう意味があるのだろうか。桜を惜しむことにはまたどのような意味があるのだろうか。

古今和歌集の春部を繙くと、新編国歌大観番号四九番の貫之の歌から八九番のこれまた貫之の歌まで四一首の桜歌がならんでいる(1)。しかもその殆どが、散ることまたは惜しむことを詠んだ歌なのである。

人の家にうゑたりけるさくらの花さきはじめたりける
を見てよめる つらゆき

ことしより春しりそむるさくら花ちるといふ事はならはざ
らなむ(古今集・春上・四九)

この歌が、桜歌の最初に位置するものである。時間経過の最初にありながら、既に、散ることが詠まれている。桜は、常に散ることを念頭に置かれている。

花が散るとは当たり前の自然現象である。しかし、梅歌が香

ばかりを詠まれるのと同じように、桜歌では散ることを詠まれる。散ることが、特立しているのである。

梅の香が漢詩文の影響により詠まれはじめたことはよく知られている。では、桜の方はどうか。桜が散り、それを激しく惜しむことはどうなのだろうか。

結論を先にいえば、漢詩文との関係はありそうである。しかし、梅の場合とは位相を異にする。梅歌の場合は、梅と香の結び付きが直接歌の方に摂取されたが、桜歌の場合は、漢詩文で詠まれた落花詩および惜落花詩の基盤が継承されたのである。但し、その場合漢詩文で詠まれる「花」は特定されたものではなかった。歌で「落花」が詠まれる時「桜」になったのである。

桜は既に万葉集でも詠まれている(2)。

足代過ぎて糸鹿の山の桜花散らずあらなむ帰る来まで

(万葉集・卷七・一二二二)

河辺朝臣東人の歌一首

春雨のしくしく降るに高円の山の桜はいかにかあるらむ

滝川 幸司

(万葉集・卷八・一四四〇)

花を詠む

春雨はいたくな降りそ桜花いまだ見なくに散らまく惜しも

(万葉集・卷一〇・一八七〇)

以上三首は、万葉集の中でも古今集に近い性格を持つもの、つまり、散ること、惜しむことを詠んだ歌である。この三首の「散る」には何か意味があるか、といえば、おそらく「花が散る」以外の意味はないであろう。「桜」の方に、例えば、「女性」というような意味があるかもしれないが、ここでは問題にならない。

題しらず

きのありとも

さくらいろに衣はふかくそめてきむ花のちりなむのちのか

たみに(古今集・春上・六六)

さくらの花のちりけるをよみける

つらゆき

ことならばさかずやはあらぬさくら花見る我さへにしづ心

なし(古今集・春下・八二)

題しらず

大伴のくろぬし

春雨のふるは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなければ

(古今集・春下・八八)

ここにあげた古今集の三首と前の万葉集の三首を比べると、はつきりするだろう。古今集の詠者は、「散る」ということにおおげさなまでの悲哀・動揺を表明している。万葉の方は、気掛かり・心配程度のものであろう。古今集桜歌の「散る」には

何か意味があるのかもしれない。少なくとも、落花・惜落花表現の生成の頃には他の意味が含まれていた可能性はある。そのような隠された意味を取り入れながら、古今集桜歌は「散る」や「散るを惜しむ」ことに対して詠者の過度の感情を表すようになったのであろう。そこに、漢詩文の落花表現が何等かの影響を与えていたと思われるのである。

万葉の落花がただそのものであったのに対し、古今集の落花が詠者に悲哀や動揺を与えるようになったのにはどういう経過があったのか、ということをも漢詩文の落花意識から探っていくことになる。

二

漢詩文の落花表現が何等かの影響を与えている、といったが、落花への詩的興味によってつくられた漢詩文そのものを参考にして歌が詠まれた、ということをおうとしているのではない。歌もしくは詩をつくりだそうとした基盤に共通するものがあり、詞句等の直接取材云々ではなく、漢詩文的発想基盤が、歌を詠むときに受け継がれ、そして、歌の方には、それを継承するだけの準備があった、ということが問題なのである。

落花への興味が開かれたのは、嵯峨朝迎である。神泉苑の花宴がそれに大きく寄与している(3)。

神泉苑の花宴は、弘仁三年二月初めて催され、記録に現れるだけでも、弘仁一三年までほぼ毎年行なわれている。この花宴で残された詩は、『凌雲集』に収載されている三首の「落花篇」のみである。毎年詩題が「落花」であったとは考えにくい。落花に対する興趣が駆り立てられたことは想像に難くない。この三首は、嵯峨天皇の詩と、小野岑守・高丘弟越の応製詩である。嵯峨と岑守の詩をやや長いが引く。

神泉苑の花宴賦落花篇 嵯峨天皇（凌雲集・三）

過半青春何所催 和風數重百花開
芳菲歇盡無由駐 愛唱文雄賞宴來
見取花光林表出 造化寧假丹青筆
紅英落処鶯亂鳴 紫萼散時蝶群驚
借問濃香何独飛 飛來滿坐堪襲衣
春園遙望佳人在 亂雜繁花相映輝
点珠顔 綴髻鬢 吹入懷中嬌態閑
朝攀花 暮折花 攀花力尽衣帶除
未厭芬芳徒徙倚 留連林裏晚光斜
妖姬一翫已為樂 不畏春風慙吹落
对此年華絕可憐 一時風景豈空捐

於神泉苑侍謫、賦落花篇、応製 小野岑守（凌雲集・五六）

三陽二月春云半 雜樹衆花咲且散
鸞駕早來遍歷覽 奇香詭色互留翫

昔聞一畝柴河陽 今見仙源避秦漢
此時澹蕩吹和風 落葉因之滿遠空
梅院不掃寸余紫 桃源委積尺所紅
看落花 落花寂寂聽無聲
青黃赤白天然染 南北東西非有情
遊蝶息尋葉初見 群蜂罷釀果纔生
侍花宴 花宴何太合良辰

玉管千調無他曲 金壘百味自能醇
台上美人奪花綵 欄中花綵妬美人
人花兩兩共相對 誰得分明偽與真
借問花節有期否 花開花落億萬春

花の散るところ鶯が鳴き、蝶が群れる（嵯峨・第四聯）。春風によって空に満ちる花ののどかな光景、そして神泉苑は桃源郷にも比定される（岑守・第四・五聯）。

さらに美人が配され、散る花と彼女等の美しさが重ね合わされ、「しばしの風光もいたずらにできようか」（嵯峨）と、この一瞬の享樂に浸り、「花の季節に限りはない、咲き散ることは永遠に続くのだ」（岑守）と、眼前の光景の悠久さを讃えて終わる。

これらの落花は、艶麗なものであり、美姫の美しさと競うものであり、共に宴の場を飾るものであった。

小島憲之氏によれば、こういった表現は六朝詩に暗示を得たものである（4）ということだが、宴の場を飾る落花は、既に

『懷風藻』に見える。

芳梅含雪散 嫩柳帶風斜（七五・初春於長王宅宴・百濟和麻呂）

椒花帶風散 柏葉含月新（七八・侍宴・守部大隅）

詩題を見ればわかるように両方ともに宴の場での詩であり、これらの落花はその場を飾るもので、「落花篇」の落花と同じる性格を持っていたのである。「落花篇」では、「落花」を主題にし、その美しさを精密に享樂的に表現していた。その点、宴の場そのものを主題にして、場を飾る役目を負う落花よりもその美しさに対して自覚的であり意図的なものである。落花そのものに詩的興味が移ったということであろう。もっとも、結果的に神泉苑での花宴の場の美しさを強調してはいるが、落花の美しさを描くことのみでその役割を果たしている。

初めて落花に目が移されたとき、それはもともと宴の場を飾るものとして存在していたものを、推し進めたものであった。そのため、華麗さが追求されたのである。しかし、そのような落花の性格が一変する。弘仁期に好んで詠まれた閨怨詩が影響したのである。

『文華秀麗集』の中に、「春閨怨」の奉和詩群（五一―五三）がある。菅原清公、朝野鹿取、巨勢識人の三首だが、嵯峨天皇の原詩は残っていない。

これらの詩は長大なため全文をあげることは控えなければならぬが、三首とも通常の閨怨詩に違わず、美しい女性が男の

もとに嫁いだところ、夫が辺塞へ戦に行ってしまったため、孤独な閨房に苦しみ、老いていくことを嘆く詩である。

女性の容貌、嘆老が問題になる。

識人の詩を見ると、女性の姿を、

妾年妖艶二八時 灼灼容華桃李姿

と、桃李に譬える。このような比喻は、既に、

春女春粧言不及 無量無數滿華庭

（中略）

還知人間仙路近 重見桃李自前生

（凌雲集・六〇・奉和親佳人踏歌御製・小野岑守）

とあり、『文選』等にも見える。めずらしいものではない。

女人の容貌が美しい桃李にたとえられるのだが、眉を柳に、笑みを桃にたとえる例の方が普通であろう。この三首の中でも清公の詩などは、そういった見立てを念頭においた表現がなされている。

可妬桃花徒映靨 生憎柳葉尚舒眉

女人の容貌を花にたとえることによって、閨怨詩での落花はある意味を持つようになる。鹿取の詩の最後にそれが表れている。

落花飛尽顏欲老 早返応見片時好

花が散ることが、即、「老い」と結び付いている。ここでの落花とは、花のごとき女人の衰房・老いを表しているのである。

閨怨詩は日本で好まれたものらしいから、落花と老いの結び付きは一般的であつたろうが、それは閨怨詩の中での場合である。しかし、逆もある。つまり、閨怨を主題にしての落花ではなく、落花を主題にしての閨怨である。落花が直接老いに結び付いているわけではないが、このような詩の存在も落花と老いの結び付きを緊密にしたものであろう。

楽府に「梅花落」という題がある。日本でも詠まれており、

『文華秀麗集』に二首が収められている(5)。

梅花落 嵯峨天皇(文華秀麗集・六七)

鷓鴣梅院暖 花落舞春風

歷亂飄鋪地 徘徊颺滿空

狂香燼枕席 散影度房櫳

欲驗傷離苦 応聞羌笛中

奉和梅花落 菅原清公(文華秀麗集・六八)

春風吹物暖 朝夕蕩庭梅

花点紅羅帳 香繁玉鏡台

榆関消息断 蘭戸歳年催

未度征人意 空勞錦字廻

この二首を見ると、前半で花の散るようすを描き、そこから、夷狄との戦に行った夫を待つ婦人の閨房へと場面が移っている。楽府の題はもとと曲名であつたが、同時に詩題と変わらな

い。つまり、落花を主題として、閨怨を描いているのである。

「梅花落」で閨怨を詠むのは、決して日本独自ではない。便宜的に『楽府詩集』を繙くと、卷二四に「梅花落」があり、次のような詩がある。

金砌落芳梅 飄零上鳳台

私妝疑紛散 遂溜似萍開

映日光光動 迎風香氣來

佳人早揮髻 試立且徘徊

(陳後主)

對戸一株梅 新花落故栽

燕拾還蓮井 風吹上鏡台

倡家怨思妾 樓上独徘徊

啼看竹葉錦 簪龍未成裁

(徐陵)

日本の「梅花落」と「徘徊」「鏡台」など字句も通っているが、内容も、花が散るや、一人妝台に向かい、征戦に行ってしまった夫を思う婦人の姿が描かれている。「梅花落」の一つの類型であつたのだろう。そして、このような婦人を主題に詠むのが閨怨詩なのである。

落花とは、「梅花落」では鏡台にいる女性を導き出すものであり、閨怨詩では、その女性の「老い」を表すものであつた。先に述べた、「落花篇」のような艶麗で享樂的なものではなく、憂愁を帯びている。特に、閨怨詩の方では「老い」という、忌

み嫌うべきものとなっていたのである。

閨怨詩、もしくはそれに類する楽府「梅花落」で、このような性格を持つに至った落花だが、そのことがはっきり現れるのが、『文華秀麗集』以後に詠まれた「落花詞」であり、これは『雜言奉和』に収められている。

この「落花詞」は五首から成り、小島氏によれば弘仁一〇年二月の河陽宮行幸の際の作である(6)。性格上は、神泉苑の「落花篇」と同じく、実景を前にして詠まれた詩であり、閨怨詩、楽府詩以上に落花という主題に即した表現がなされたはずである。だが、「落花篇」と異なり、憂愁を負っている。閨怨詩的言辭が見られるのである。五首の「落花詞」の中で、滋野貞主の詩がそれで、

妾淚常悲共水滴 妾顔猶畏与花衰

という表現がある。落花という主題で、怨婦の嘆きと老いが描かれているのである。この滋主の詩は、閨怨詩的落花が落花の属性に取り込まれたことを証明するだろう。しかし、他の「落花詞」には、閨怨詩的落花をそのまま取り入れず、別の問題を有しているものがある。それは、残り四首中の坂田永河と菅原清公の詩に見える表現である。

将花擬人人将故 人故花新遞惜紅(永河)

年年歲歲花如茲 看来看去無息時(清公)

これらは、明らかに初唐劉希夷の「代白頭吟」の「年年歲歲花相同 歲歲年年人不同」を摂取したものである(7)。花は、

散っても、毎年同じように咲く。しかし、人はただ老い行くだけである。

花の咲き散ることの悠久さは、先にあげた岑守の「落花篇」に、

借問花節有期否 花開花落億万春

として見えるが、「老い」は問題にされない。「年年歲歲」的表現の中では、こういった自然の悠久さと、過ぎて行く時間の中では無力な人間の有限性とは対比されている。「花」は、人間の一生など何事も無かったかのように吞み込んでしまう恒久性を持った自然を表している。その点で、閨怨詩中の、人間の「老い」そのものである落花と、「老い」を対比することによって強調するものである落花とは、性格が異なる。

しかし、どちらにしろ、落花は「老い」を喚起させるものであった。それは、単に、閨怨詩的なものにとどまらない。人間全体の問題として「時」を表すものでもあったのである。

落花そのものは、美しいものとして捉えられていたかもしれない。しかし、その喚起するものは「老い」であり、人間が立ち向かってでも永遠に勝利することのできない「時」でもあった。そういう隠されたイメージとしては、落花は否定的なものであったろう。

このような落花意識の形成の中で「惜落花」とはどのような意味を持つのだろうか。単純に、花に対する愛着である、といいきってよいのであろうか。

先に問題にした坂田永河の「落花詞」に「惜落花」の言辭がある。これを検討することで、答が出てくるだろう。

奉和聖製江上落花詞 坂田永河(雜言奉和・一)

天子乘春幸河陽 河陽旧來花作泉

一唄併是落花時 落花隨風映江辺

濃香不異武陵迷 輕盈髣髴陽台夢

山路吹落明月中 渡頭紛紛細草叢

惜落花 飛來飛去任春風

將花擬人人將故 人故花新遞惜紅

只為芬芳近仙看 万樹榮暉一種同

看落花 一半蕭灑一半結

今歲蹉跎雖落尽 明年還復堪攀折

この詩の五聯目に「惜落花」の表現がある。惜しまれる落花は何を意味しているのか。六聯目に前述した「將花擬人人將故人故花新遞惜紅」の聯がある。「惜落花」とは、直接には、春風の思うままになっている花に向かっていているのだろうか、そのすぐ後にこの表現があるのである。落花から連想が「人間の老い」に導かれ、「代白頭吟」に学んだのだろう。「惜落花」の時点で、それまで落花を叙述してきたのが、詠者の感情を詠み込む段階に入ってきて、そして詠まれたのが、「人間の老い」なのである。「惜落花」という言辭自身が契機となって「老い」を導き出している。つまり、「惜落花」には、既に、「老い」が隠されており、それが表出されたのである。落花には、眼前

にある花だけでなく、それが喚起するものも含まれていた。だからこそ、「惜落花 飛來飛去任春風」に続いて、「老い」が描かれるのであろう。落花という事象を確認し、惜しむことにかえて、今のこの瞬間よりも翌年に思いが飛び、その時にもまた咲く花が意識され、自分は歳を重ねているのだ、ということを感じるのである。「落花」と「老い」が密接に結び合い、花が散るのを惜しむことが、「老い」を嘆き惜しむことにつながるのである。

この詩は、前半では、「武陵迷」「陽台夢」(8)と、落花の美しさを故事を踏まえて華麗に描き出しているが、決してそれが主題なのではない。

今歲蹉跎雖落尽 明年還復堪攀折

この詩の尾聯である。散る花のごとく人は老いて行くが花はまた新しく咲く、と詠まれた後にこの表現がある。ならば、この聯の言外に、人間の生のはかなさを感じるとしても、あながち付会ではあるまい。明年もまたこの花は咲き、手折ることはできるだろうが、人は、着実に「老い」へと向かっているのである(9)。

「惜落花」という表現は、人事と深く結び付いている。花に対する愛着が全くないとはいえない。咲いているこの瞬間の花に心を奪われているからであり、この一瞬の「時」への執着があったからこそ「惜落花」だからである。しかし、その執着は、「生」への執着でもあった。「惜落花」は過ぎ行く「時」

に向かつて発せられたのである。

永河の詩は、それまでの落花意識の基盤から生じた詩である。「老い」や「時」と結び付いていた落花を用いて嘆老を表現したのである。

「惜落花」とは、「惜老」でもあった。落花と「老い」「時」が密接な関係にある、それが、弘仁期の落花意識であった。

三

前節で、弘仁期の落花意識を見てきた。落花が人間の生の悲哀を帯びていたことが明らかになったと思う。「老い」の直接の喩となり、「時」を表すものでもあった落花であるが、このような状況下『白氏文集』が渡来し、その落花が摂取される。

『白氏文集』の渡来は、承和期といわれるが、その結果、日本漢詩人がどのように落花を表現したかについては、この時期の漢詩文が殆ど残っておらず、まとまって残っているのがやや時代の降った嶋田忠臣や菅原道真の詩集であるので、ここでは直接『白氏文集』の落花を見ていく。

- ①百花落如雪 兩鬢垂作糸（白氏文集卷六・晚春沽酒）
- ②引手攀紅桜 紅桜落似霰（同卷一一・花下對酒）
- ③漠漠紛紛不奈何 狂風急雨兩相和（同卷一六・惜落花、贈崔二十四）

④花尽顏新白 登樓意若何（同卷十六・晚春登大雲寺南樓、贈常禪師）

⑤桜桃昨夜開如雪 鬢髮今年白似霜（同卷十八・感桜桃花、因勝飲客）

⑥二月五日花如雪 五十二人頭似霜（同卷二十・二月五日花下作）

⑦落花如雪鬢如霜 醉把花看益自傷（同卷二五・花前有感、兼呈崔相公、劉郎中）

⑧日斜啼鳥思 春尽老人心（同卷二六・惜落花）

⑨落花無限雪 殘鬢幾多糸（同卷三三・殘春詠懷、贈楊慕巢侍郎）

以上九首、『白氏文集』の中から落花が詠まれた句を抜出した。それぞれ我が国でよく知られたものであろう。

これらの例の中でも落花は「老い」と結び付いている。その点だけからいえば前代の落花と同じである。また、逆にいえば、前代のような基盤があったので、これらの詩句は受入れやすかったということでもある。

しかし、この落花と「老い」の関係は前代のものと全く同一か、といえは必ずしもそうではない。①④⑤⑥⑦⑨の例はほぼ同じ性格を持っているのだが、これらの詩句では、落花または花が雪にたとえられ、雪の白さが髪の色を導き出し、「老い」を呼出しているのである。落花そのものが直接「老い」に結び付いているのではない。「雪」が介在して、「白」という色か

ら白髪、そして「老い」が導き出されたのである。「年年歳歳」的な落花と似ていないこともないが、落花の方に、無限の「時」悠久な自然が問題にされているわけではない。

③④の例は「惜落花」を主題としている。しかも⑧の例はこの題で老人の心を詠んでいるのだから、前述の永河の例と同じである。「惜落花」という趣向は、前節でその萌芽を見たのであるが、この白居易の詩でも、どうやら同じような詠まれ方がなされており、落花と「老い」の結び付きから現れたのである。落花と「老い」の関係は、「惜落花」と言う趣向でより緊密になっていったが、この趣向の広がり、後に、桜歌で「散るを惜しむ」の発想が多く詠まれた原因にもなる。

論が前後したが、「惜落花」は白居易だけの影響ではない。白居易の詩が大きな力を持っていたことは確かだが、そこには、唐詩全体の趨勢があったのである。便宜的に唐詩の「惜落花」及びそれに類する詩題を調べると、以下のようになる。

惜花（郭震） 惜春傷同幕故人孟郎中兼呈去年見花友（李益） 惜花（于鵠） 惜花（張籍） 四首 惜花吟（鮑氏君徽） 惜牡丹二首（白居易） 惜落花（白居易） 惜落花贈崔二十四（白居易） 惜春贈李尹（白居易） 惜花（白居易） 惜花（劉言史） 惜花三首（張碧） 惜花詞（施肩吾） 惜花（施肩吾） 惜春（杜牧） 惜春（許渾） 惜春（薛能） 惜春詞（溫庭筠） 惜花（陸龜蒙） 惜花（來鵠） 惜花（李山甫） 惜花（方干） 惜春（羅鄴）

惜花（唐彦謙） 惜花（韓偓） 惜春（韓偓） 惜牡丹（徐寅） 惜花（任翻） 惜花（李建勳）二首 惜花寄孫員外（李建勳） 惜花（張泌） 惜花（成彥雄） 惜蓮花（崔櫓） ※配列はほぼ時代順

郭震を除くと、いずれも中唐、晩唐の詩人である。中唐の頃から「惜花」の詩題が多くなり、そこに白居易が重要な位置を占めている。このような趨勢が日本に影響を与えた、ということも考えられるのである。

中唐より顕著になる「惜花」の趣向を受入れるための準備は日本でもできていた。前代の落花意識の中で醸成された「惜落花」がそれを物語る。そういった基盤の中に取り入れられたのである。

ここまで弘仁期から承和期周辺までの漢詩文の落花意識を見てきたが、この中で「桜」を対象とした落花は殆どない。「桜」に限らず、落花詩の中で詠まれる「花」は全く特定されていないのである。注意すべきであろう。

桜は、漢詩文で全く詠まれなかったわけではない。「懷風藻」「凌雲集」「経国集」に見える（10）が、後藤昭雄氏の論考（11）によれば、本格的には承和期頃から詠まれ始めたようである。

ところで、先にあげた『白氏文集』の例に戻るのだが、②⑤の詩は、「紅桜」「桜桃」が詠まれている。『白氏文集』には、「紅桜」「桜桃」を詠んだ詩が他にも見出せる。

緑蕙不香饒桂酒 紅桜無色讓花鉤（白氏文集卷一四・宴周
咭大夫光福宅）

紅桜満眼目 白髪半頭時（同卷一六・桜桃花下歎白髮）

亦知官舍非吾宅 且斷山桜滿院栽（同卷一六・移山桜桃）

桜桃落砌頭 夜合隔簾花（同卷二四・春尽、勸客酒）

春風先苑苑中梅 桜杏桃梨次第開（同卷二七・春風）

楊柳花飄新白雪 桜桃子綴小紅珠（同卷三一・酬舒三員外
見贈長句）

藹藹美周宅 桜繁春日斜（同卷三六・桜桃花下有感而作）

「桜桃」「紅桜」が日本の桜と同じ、というわけでもないだろうが、日本の詩人は、「桜」という字面から同じように受け取ったかもしれない。中国でこのような「桜」が詠まれることは少ない。白居易が突出している（12）。承和期頃から、日本の漢詩文で桜が詠まれ始めたのにはこのような状況があったからかも知れない。

さらに、白居易の落花詩には「桜」が詠まれていた。落花と桜の結び付きはこの辺りからでてきたのだろうか。

（貞観八年）閏三月丙午朔。鸞輿幸於太政大臣東京染殿第。
觀桜花。王公已下及百官屬從。（中略）喚能屬文者數人。
賦落花無數雪詩。終日樂飲。皇歡是洽。群臣具醉。

（日本三代実録）

藤原良房の染殿第での桜宴である。桜の詩宴は記録に現れるものでは天長八年にも舉行され、染殿第でもこれ以前に桜宴が

行なわれていた（13）が、注目すべきは詩題である。「落花無數雪」とある。桜が落花を主題としてよまれた最も古い例が、この記事なのである。この詩題は、諸氏の指摘（14）によると、先にあげた、『白氏文集』の例の②を出典とする。桜と落花の關係には白居易が関わっているらしい。もちろん、これだけでそれがいえるわけではない。しかし、これまで考察してきた落花は、花を特定されていなかった。それが、桜という具体的な花を対象にしたのである。桜と落花の結び付きの端緒にはなっただろう。

落花には、「老い」という意識があったようである。そして、「惜落花」は、そのような「老い」を拒絶するものであった。どうやら、最初にあげた桜歌の問題もここに起因しているらしい。花の散ることに対して、おおげさなまでに詠者の感慨を詠み込むことになるのは、このような落花意識を継承したからであろう。また、「惜落花」詩の受容が、歌の世界にも広がり、いかに「惜落花」を詠むかが問題にされ、詠者の様々な感情が表現されるようになったのであろう。

しかし、この結論を導くにはまだ不十分である。歌の世界に、このような落花意識を受け継ぐだけの基盤がなければならぬ。それを確認して初めていえることである。今度は、歌の方から、今まで論じてきた落花意識との結び付きを考察していく。

四

桜は歌ではどのように詠まれていたのか。古今集のよみ人しらずの歌から考えたい。よみ人しらずの歌の全てが古い時代のものであるわけではない。しかし、古今集時代及びそれ以前の歌で最も典型的で基盤的なものが多いことは確かであろう。

題しらず

よみ人しらず

春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく

(春下・六九)

まてといふにちらでしとまる物ならばなにを桜に思ひまさ

まし(春下・七〇)

のこりなくちるぞめでたき桜花ありて世中ではてのうければ

(春下・七一)

このさとにたびねしぬべしさくら花ちりのまがひにいへち

わすれて(春下・七二)

空蟬の世にもなるか花ざくらさくと見しまにかつちに

けり(春下・七三)

以上は、古今集春歌下の冒頭に位置するよみ人しらず歌である。

この五首のうち、七〇・七一・七三番歌に注意してみると、「散る」という事象に託して詠者の感慨を詠んでいる。桜歌の基本的な詠まれ方であるが、この中でも七一・七二番歌では「世の中」を引合に出して詠んでいる。

七一番歌は通常「すっかり散るのが愛(め)でたいのだ、桜花よ。なまじ生きながらえては、世の中というものは、ついにはつらい思いを味わうのだから」(新大系古今和歌集・脚注)と解釈されるように、散ってしまう桜をほめ讃え、生き長らえると辛いことの多い世の中を憂えた歌である。

また、七三番歌は、桜の咲き散ることのはかなさを、世のはかなさにたとえている。桜のはかなさと世のはかなさを同列に扱うとは、いかにもおおげさな印象を与える歌であるが、桜が咲いてから散るまでの数十日が、はかなき世、おそらくは人の一生にたとえられるところにおもしろみがあり、さらにいえば、この比喩が成立するためには、世の中というものはかなさが、桜をたとえにしても奇異ではない程度に、人間にとって切実なもの、あるいは、詩歌の世界で常套的表現となっていなければならない。

要するに、この歌の比喩は逆の方がすっきりするのではないか、ということである。世の中のはかなさを強調するために、桜を持出した方がわかりやすい歌になる。無論、この歌にそのような解釈は許されない。

この二首は、共に、世の「憂さ」「はかなさ」が前提となっている歌であったといつてよいだろう。そのように、世の中を嘆く歌を古今集中に探すと、次のような例が見出せる。

ちる花をなにかうらみむ世中にわが身もともにあらむものは(春下・一二・よみ人しらず)

こひしなばたが名はたたじ世中のつねなき物といひはなす
とも（恋二・六〇三・深養父）

世中はなにかつねなるあすかがわきのふのふちぞけふはせ
になる（雑下・九三三・よみ人しらず）

雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世中のうさ（雑
下・九三五・よみ人しらず）

世中は夢かうつつかうつつとも夢ともしらず有りてなけれ
ば（雑下・九四二・よみ人しらず）

世にふればうさこそまされみよしのいはのかけみちふみ
ならしてむ（雑下・九五一・よみ人しらず）

これらの歌も殆どがよみ人しらず歌である。ここにもいくつ
かあげたが、雑歌下の冒頭には、周知のように、世の中の無常
を詠んだ歌が収められており、多くがよみ人しらずの歌である。

先の桜歌二首は、これらの一連に組込まれるのではない。
つまり、世の中の「うさ」「はかなさ」を表現するために用い
られている「あすか川」「朝霧」「夢」と同じような喩として
「桜」が使われているのではないか、ということである。さら
には、これらの殆どがよみ人しらずの歌であることを考えると、
一連のものであるという考え方は一層強まる。

このような「無常歌」の例は、古今集以外、特にそれ以前に
見ることができないか、といえ、決してそのようなことはな
い。

世間を何に喩へむ朝開き漕ぎ去にし舟の跡なき」とし（万

葉集・卷三・三五・満誓）

世間は空しきものとあらむとそこの照る月は満ち欠けしけ
る（万葉集・卷三・四四二・作者未詳）

世間し常かくのみとかつ知れど痛き情は忍びかねつも（万
葉集・卷三・四七二・家持）

世間は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり
（万葉集・卷五・七九三・旅人）

世間の すべなきものは 年月は 流るることし（中略）
世間や 常にありける（下略）（万葉集・卷五・八〇四

・億良）

世間を常なきものと今を知る奈良の都のうつろふ見れば

（万葉集・卷六・一〇四五・作者未詳）

世間の常なきことは知るらむを心尽くすなますらをにして

（万葉集・卷一九・四二六・家持）

以上は、万葉集の中で「世間」の「はかなさ」を詠んだ歌を
抜出したものである。作者を見てもわかるように、天平期、特
に、旅人等の周辺で「無常歌」が詠まれていたことが知られる。
ここで注意したいのは、満誓歌と四四二番の作者未詳歌である。
世の無常を、船の航跡や月の満ち欠けにたとえているのであ
る。ただ「むなし」「はかなし」というのではなく、例えを出
して、はかなさを示しているのである。

世の中の無常というものが、歌の表現に現れたのは、旅人周
辺の歌人達の間からであった。こういった無常観は、仏教的な

ものであり、その浸透と共に広まっていったようである。そうして、無常歌の中に、世のはかなさがある別種のものはかなさにたとえる表現が現れたのである。そのような表現は一種遊戯的であるかもしれないし、また、技巧に墮する可能性のあるものであったかもしれない。しかし、それだけ、詠み方が固定されているということでもあるので、広まりやすくもあつたろう。世の中むなし、はかなし、と詠み出しておいて、それを下句で何かにたとえる、という詠み方が類型化され(15)、古今集の無常歌まで連なっている、と考えられるのである。

無常を何かにたとえる、何かを引合に出す、という「何か」に桜が使われたこともあつた。

厚見王、久米女郎に贈る歌一首

やどにある桜の花は今もかも松風速み地に散るらむ(万葉集・巻八・一四五八)

久米女郎の報へ贈る歌一首

世間も常にしあらねばやどにある桜の花の散れるころかも(万葉集・巻八・一四五九)

久米女郎の歌は、世の中も無常であるから桜も散る、といっている。久米女郎は伝未詳の人物だが、厚見王は、第四期歌人であり、旅人等の後の歌人である。従って、この贈答歌の詠まれた時期は、先の無常歌が詠まれた後に位置する。久米女郎が世の中も不定であるから桜が散る、と詠んだのも、天平期以来の無常歌と全く無関係だとは考えられない。無常を何かにたと

える、という詠み方の広まりの中で詠まれたと考えるのが妥当であろう。

この歌は、世の中が無常であることを、桜が散る理由にしているようだ。世の中が不定で、常あるものではない、ということと、桜が咲き且散る、ということとに何等かの関係を見ているのである。世の中も常でなく変転するのに、どうして、桜のみ常に咲き続けることができようか。そういう意識が、この歌にはあるのである。それは、天平期の旅人等の間で醸成されたものであろう。そうであつてこそ、桜の散る理由に、世の無常を持出すことができたのである。世の無常を理由に、桜が散る説明をすることは、古今集七三番歌の、桜のはかなさを世の無常にたとえる詠み方に接近している。また、歌の構造自身も、滴誓や四四三番の歌と通じており、上句に世の無常、下句にそれを象徴する事象を据えている。

このように、既に万葉集の中に無常歌の一連として桜歌があつたことが知れた。古今集のよみ人知らずの桜歌、無常歌はここに直結すると見てよいだろう。

例えば、伊勢物語に次のような歌がある。

散ればこそいとゞ桜はめでたけれうき世になにか久しかる
べき(八二段)

この歌は、古今集七一番歌の改作か、という説もあるが、類歌とすべきで(16)、万葉以来の無常歌の一連の中から生まれてきた詠み方なのである。

世の中のはかなさと直結する桜を見てきた。ここまでの考察でも、桜に対する意識と、先述した漢詩文での落花意識との共通性も見えてきたが、歌と詩の発想の接近を物語る桜歌の例があるので、それを見る。

五

東宮雅院にてさくらの花のみかは水にちりてながれけるを見てよめる
すがのの高世

枝よりもあだにちりにし花なればおちても水のあわとこそなれ（古今集・春下・八一）

この歌は嵯峨朝で詠まれた歌で、古今集の作者判明歌の中で最も古い桜歌である。

桜のはかなさは、万葉以来、世の無常と共に定着しつつあったと思われるが、この歌ではそれが「あだ」と表現されている。この歌に、前代からの仏教的無常観があるかどうかについて、山口博氏が興味深い指摘をしている。

「あたに散りにし花」は「あだ花」であるが、無常の世に咲き散る「あだ花」は「影花」にイメージは通う。

三千二法界 一十三生死 空色将有無 俄頃復忽矣 影花仮艶嬌 風火期滅已

（『経国集』巻第十。小野岑守「帰休独臥寄高雄寺

空海上人」

仏典にいう「虚空花」は「无色无形但有名」（十喻詩）であるから、実体のない花であるが、「虚空」は空しい意であるゆえに「虚空花」は空しい花、あだ花と水泡、それは虚空花と水泡である。既に落花流水に無常観という仏教思想を認めているのであるなら、虚空花と水泡の配置が真言修行の十喻を詠じた十喻詩の如泡喻・虚空花喻、それを説く「大日経」「大日経疏」のその喻が、高世の歌の思想であることを認め得るのである（17）。

山口氏は、高世の歌に、落花流水を見、そこに、仏教的無常観を認め、さらに漢詩文の「影花」「虚空花」が「あだ花」の背景にあった、とする。

確かに、この指摘は正しい。少なくとも、この歌に仏教的無常観を認めることに關しては、これまで論じてきた無常歌の一連としての桜歌とつながっている。ただ、前代からのこのような基盤があったから、「桜」＝「あだ花」という見方ができたのである。突然、「十喻詩」を撰取したわけではない。それなりの基盤があったのである。

桜は、はかなきものとして定着しつつあり、そこに、仏教的無常観が関わっていたことはこの歌によってもわかった。この歌では、「空花」が影響し、さらに、仏教的無常観の色合いを強めたのであろう。漢詩文に、「空花」というのがあり、それを直接取材した、というようなこととは異なる。山口氏もその

辺は慎重になっているが、あくまで、そういった「思想」が背景にあった、というだけである。

「空花」を詠んだ詩としては、

水月非真曉 空花是偽春（凌雲集・七四・遊寺・小野永見）

空花灼灼有何実 无色无形但有名（詠虚空花喻・空海）

とある。ここでは、「空花」は春のものではあるが、桜ではない。しかし、高世の歌は桜を詠んだものである。この関係は、落花と桜にも通じるものである。落花詩で殆ど桜は詠まれないにもかかわらず、歌になると、桜と特定されてしまう。漢詩文と歌の違いであり、「時」を介して結び付いた、歌と詩の共通基盤が現れているのである。高世の歌でいえば、それは、仏教的無常観である。一連の無常歌の中に桜があり、それをさらに仏教的な「空花」を背景に詠んだ。そこに、おなじように「空花」を詠んだ永見や空海がいたのである。この両者の関係が直接的なのかどうかは厳密にはわからない。しかし、発想基盤の接近は見て取れよう。

桜の落花は万葉以来、仏教的無常観を背景にした無常歌の一連として詠まれてきた。高世の歌などは、歌と詩の接近を物語っていた。歌と詩の発想の基盤は近いところまで来ていたのである。

歌での桜の落花は、落花自体が問題にされることはなかった。咲き散ることのはかなさが世の無常の引合に出されたのである。このような詠まれ方が、漢詩文の落花意識と結び付く要因となる。

漢詩文の落花は、「老い」と緊密に結び付いていた。それは、いわば過ぎ行く時を表すものでもあった。このような落花意識が形成されたのは、弘仁期である。その同じ頃に、菅野高世の歌が詠まれていた。世の中の変転のはやさの比喩となっていた桜であったが、詩の方で形成された落花意識とは、「はかなき時」を詠むということで共通していた。しかし、まだこの両者は結び付かない。歌の方で漢詩文を意識しなかったためであるが、桜自身が詩材とはなっていないこともあった。

承和期以降桜が公的にも詠まれ始める。さらに、白居易には「紅桜」「桜桃」を題材にした落花詩があった。そして、貞観八年の藤原良房の桜宴が行なわれる。そこでは、桜の落花が詩題になっていた。白居易の影響があるのだ、と先に述べたが、決してそれだけが理由ではない。歌で形作られてきた「桜」のイメージが多少なりとも流出していた、とも考えられる。無常歌の一連として詠まれていた桜と落花詩は共に「はかなき時」を主題にしていた。だから、新たな落花詩が詠まれる時、散る花は桜となったのである。そういう意味では、白居易の桜詩は、桜と落花が結び付くきっかけであった。

このことは歌の方でもいえる。桜が歌において、散ること、または、惜しまれることを頻りに詠まれるのは、漢詩文を意識したためである。承和期以降は、歌の復興期でもある。そして、撰者の時代になると、歌を公的なもの、つまり、漢詩文と同じ地位に引き上げようとする。そこに、漢詩文的基盤を吸収しようとする動きが本格的になった。桜歌は、古今集の中では撰者時代に最も多く詠まれている。歌の桜は、無常歌の一連として詠まれてきたが、漢詩文の中で詩材となり、その地位は向上していった。だからこそ、選者時代に最も桜歌が多く、その詠みぶりは、漢詩文の落花意識を受け継いだものなのである。

さくらの花のもとにて年のおいぬることをなげきてよめる

いろもかもおなじむかしにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける（古今集・春上・五七）

この歌は、白居易の「桜桃花下歎白髮」に学んだものとされる（18）。しかし、この詩のみに学んだわけではない。落花詩の伝統の中の歌である。この歌は落花が問題にされているわけではない。しかし、坂田永河の詩で考察した時に、散るといふ事を確認した瞬間、次の年にはまた咲くのである、ということを感じることになる、と述べたことと同じように、この歌では、新たに咲く花を見て、また散り、そしてまた新しく咲く、ということを意識しているのである。桜歌は、落花詩の基盤を取り込んでいるのである。

何故、桜は散るのか、何故、桜は激しく惜しまれるのか、そこには、落花に何か意味があるからではないか、ということの問題にできた。落花には、「過ぎ行く時」が隠されている、ということが明らかになった。人は「落花」を惜しみながら、「過ぎ行く時」を惜しむ。もはや帰ってはこない「時」はそこにあるから、人の嘆きは大仰になるのである。このような詠まれ方は、しかし、初期の頃だけであつたかもしれない。桜を詠む最初にこのような詠み方がなされ、桜といえば、散る、ということが、常套句となり、惜しむことにも、「過ぎ行く時」など意識されずに、ただその趣向のみが残っていくことになったのかもしれない。しかし、歌人たちが、執拗に桜を惜しむのは、やはり「時」を意識していたからだろう。少なくとも古今集歌人たちはそうであつた。こういった表現が完全に類型化するのもっと後のことである。

付論

古今集桜歌の背景の落花意識を論じてきたが、古今集の中で新たな桜の詠まれ方がある。それをここで問題にしたい。

落花詩のところでも少し述べておいたことではあるが、散る、という事象自身は果たしてどのように捉えられていたのだろうか。「老い」であるとか「時」であるとかは、隠された喩で

あつて、落花そのものが直接そうであるわけではない。このような疑問を思わせる歌が古今集には多く存在するのである。つまり、桜が散ることを美しいとする現在まで続く美意識の萌芽が見て取れるのである。

桜ちる花の所は春ながら雪ぞふりつつきえがてにする（春下・七五・承均）

雪とのみふるだにあるをさくら花いかにちれとか風の吹くらむ（春下・八六・躬恒）

この二首に老いが感じられるだろうか。桜を雪に見立てることとは、漢詩文に学んだものである。桜の落花を雪に見立てた最初は先にあげた良房の桜宴であるが、『白氏文集』にもあった。しかし、本論でも述べたが、雪にたとえるのは、落花と白髪の間在物としてである。「老い」を表現するための「雪」だったのである。しかし、この二首にはそのようなことは見えない。

躬恒の歌は「風」を恨むことで桜を惜しんでいる「惜落花」の歌である。そこだけを見れば、漢詩文での落花のように否定的意識があるのかもしれない。しかし、これはそのような歌ではない。風に舞って桜が散る様子が、まるで「美しい雪」のようなのである。「雪」は「白髪」と重ねられるところか、この「雪」のために桜の落花は美しく印象づけられるのである。

「桜」（花）と「雪」の見立ては、「老い」を喚起するものであった。それが歌の方では、美しく散る桜の比喩となっていたのである。

ところで、同時代の漢詩文の落花表現はどのようになっていたのだろうか。漢詩文でも、このように落花意識の逆転が起きているのなら、歌独自のものとはいえない。

我悲凋落浮煙水 君歎低飛宿草門（菅家文章・二九一・

（前略）更用園字、重感花鳥）

何因苦惜花零落 為是微臣身職拾遺（同・三八四・春、惜
櫻花応製）

花已凋零鶯又老 風光不肯為人留（同・四五六・三月三日、
侍朱雀院柏梁殿、惜殘春、各一字、応太上皇製）

これらの詩句で使われている「凋落」「零落」「凋零」が問題になるのだが、例えば、桜の落花で使われている「零落」の語は、

弧樹輪囷久 三秋零落時（凌雲集・七六・言志・淡海福良
満）

のように、秋に草木が落ちることを表し、

知旧零落已無其人（同・五四・題・林楚婆）

のように、人が落ちぶれることをもいうのである。漢詩文の落花意識は前代以上に否定的である。散る、という表現自体に否定的な語を用いている。歌の落花は漢詩文から離れているのである。

「雪」に見立てることは、落花意識を逆転させた。漢詩文において「白髪」を導くものであった「雪」は、歌では、桜の散り乱れる姿を表すものとなったのである。現在のわれわれが思

う「桜の散ることの美しさ」とは、このようなどころから現れたのかもしれない。事実、古今集の桜歌は、殆どが、散ることを惜しまれる歌であるが、配列で最後に位置し、また、詠まれた時期でも最後になる次の貫之の歌は、散ることの美しさを詠んでいる。

亭子院歌合歌

つらゆき

さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらに浪ぞたちける（春下・八九）

ここには、「雪」との見立てはないが、散った後の花びらが余波に見えるという光景は、幻想的でさえある。片桐洋一氏は、現実にはあり得ないことだが、みごとに心象風景。みごとに図様化、様式化（19）。と絶賛している。

同じ歌合で、貫之は「雪」を見立てに使い、桜の散ることの美しさを詠んでいる。

さくらちるこのした風はさむからでそらにしられぬゆきぞふりける（拾遺集・春・六四）

桜の落花は美しい、という美意識は、このようなどころから兆したのである。

注

（1）古今集には、他の部に一二首の桜歌がある。なお、春部には、九〇番歌以後、一一八番歌まで「花」の歌があり、

松田武夫氏は「後半の桜」とするが（『古今集の構造に関する研究』（風間書房）その他）、全てが「桜」だとはいえない。ここでは、歌本文または詞書に「桜」と明記されるものを扱う。

（2）万葉集には四三首の桜歌がある。

（3）神泉苑の花宴を「桜宴」とする説がある。山田孝雄氏『桜史』（講談社学術文庫）小島憲之氏『国風暗黒時代の文学 中（中）』（塙書房）所収「凌雲集詩注」、また近年刊行された『平安時代の儀礼と歳事』（至文堂）の「平安時代の年中行事」（山中裕氏執筆）等があるが、後藤昭雄氏が後掲論文の中で、嵯峨・岑守等の詩には桜を思わせる措辞はなく、「むしろ、「紅花落つる処驚乱れ鳴く、紫萼散る時蝶群れ驚く」（嵯峨）、「昔聞く一県河陽に栄えしことを、今し見る仙源秦漢を避くることを」「梅院掃はず寸余の紫、桃源委積りぬ尺所の紅」（小野岑守）などの句があって、桃や梅を詠出する。花宴節を観桜の宴と見ることはできない」と否定されている。さらに付け加えると、岑守の詩の第一聯は、「三陽二月春云半 雜樹衆花咲且散」である。これは、「二月云過半 梅花始正飛」（経国集・八二・落梅花・平城天皇）と近似している。桜の落花とはいえないだろう。

なお、漢詩文の落花意識については、菅野礼行氏『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』（大修館書店）に

論述があり、重なる点があることをお断りしておく。

(4) 前掲「凌雲集詩注」に、隋江綰の「梅花落」をあげる。

(5) 『経国集』に「落梅花」(平城天皇)「奉和梅花落」

(小野岑守、和氣広世)の三首がある。おそらく、楽府「梅花落」に学んだものであろう。なお、岑守の「奉和梅花落」には、閨怨詩的言辭が見られる。

(6) 『国風暗黒時代の文学 中(下)』(塙書房)

(7) 「代白頭吟」の受容については、山根对助氏「はなぞむかしの——代白頭吟」受容史の一駒——(北海学園大学学園論集第一一〇号・昭和四二年九月)がある。その中で指摘された詩は、『文華秀麗集』前後のものであり、『懷風藻』には「代白頭吟」の影響は見られない。却って、万葉集の方にある(小島氏「上代日本文学と中国文学 中」(塙書房)参照)。現存の詩文のみで考えると、漢詩文での表現の方が遅れたことになる。ここで、『文華秀麗集』前後に、「代白頭吟」的表現が現れる理由を考えると、この詩には、「洛陽女兒好顔色 坐見落花長嘆息 今年花落顔色改 明年花開復誰在」という女兒の述懐がある。この述懐が、閨怨詩中の怨婦のものと同じように考えられたのではないかと、そして、『文華秀麗集』頃から閨怨詩が好まれはじめたのと軌を一にして、「代白頭吟」的発想の詩がつくられるようになったのであろう。

なお、永河の詩は、落花そのものが「老い」に重ねられて

いる、という点で「年年歳歳」的落花(後述)とは異なる。閨怨詩が愛好された中で受容がこのような表現を現出させたのであろう。

(8) 「武陵迷」は、陶潜「桃花源記」、「陽台夢」は、宋玉「高唐賦」の故事。

(9) 小島憲之氏もこの聯を「今年の春は忽ち流れてゆき花は悉く散ってしまったが、来年もまた再び咲いて花を攀折することができよう……(人は旧りゆくけれど)」と解釈されている。

(10) 『懷風藻』に二首見えるが、景物として詠み込まれるのみである。『凌雲集』に二首、平城天皇の「賦桜花」と賀陽豊年の「三月三日侍宴応詔」がある。豊年の詩は景物として詠み込まれるのみ。『経国集』に豊年の「詠桜」があり、これは、小島氏によると平城の「賦桜花」の応製詩である。結局、桜を主題とした詩は、平城と豊年の二首だけだが、小島氏の注にもあるように、桃詩、梅詩を参考にして詠まれたものである。

(11) 後藤昭雄氏「王朝の漢詩」『日本文学講座 詩歌Ⅰ』(大修館書店)

(12) 神谷かをる氏「色も香もさくらめど——古今集の「桜」と漢詩文——」(光華女子大学文学部研究紀要第二十九集日本文学科篇・平成三年十二月)にも記述があるように、『文選』等にわずかに見出せる程度である。

(13) 参考までに、「桜の文学史」関連略年表を諸氏の論考をもとに古今集以前までを作製すると以下のようになる。

◎延暦年間 平城東宮時代(延暦四年〜同五年) 桜詩二首、「賦桜花」(平城・凌雲集・二) 「詠桜」(賀陽豊年経国集・二五)

◎大同三年二月二十九日 詔で曲水宴停廃(類聚国史) ※この時まで、「三月三日侍宴応詔」(豊年・凌雲集・三六)

(◎) 弘仁三年二月一二日 神泉苑の花宴始まる(日本後記)

※後世の花宴とは異なり、桜宴ではない

◎弘仁年間 菅野高世(弘仁一一年周防守)の桜歌(古今集・六九)

◎天長八年二月一六日 後宮で曲宴「翫殿前桜花也」「令賦桜花」(類聚国史)

◎承和年間 「承和之世、清涼殿東二三歩、有一桜樹」(菅家文章・三八四・春惜桜花応製・序)

◎仁寿元年三月一〇日 良房東京第において先皇(仁明)のために法華経を講ず。東京第の桜を見て先皇をおもう。「公卿大夫或賦詩述懷或和歌歎逝」(文徳実録)

◎同三年二月三〇日 良房第に行幸。桜花を見る(文徳実録)

◎貞観六年二月二五日 染殿第へ行幸。桜花を見る。「令賦詩」(三代実録)

◎同八年三月二三日 良相西京第へ行幸。桜花を見、百花亭詩を賦せしむ。都良香の序(三代実録)

◎同八年閏三月一日 染殿第へ行幸。桜花を観る。「落花無數雪」詩を賦せしむ。(三代実録) ※橋本不美男氏「王朝和歌史の研究」(笠間書院)に、後撰集五六の源融の歌はこの時のものとする。

◎寛平元年三月七日 公卿三四人、侍從局において、外記、内記、知文者五六人に、詩を賦せしむ。題、「拾遺局前桜樹下作」(日本紀略)

(◎) 同三年三月三日 曲水宴、詩人に勅して「花時天似醉之詩」を賦せしむ。(日本紀略) ※「田氏家集」一七一

「菅家文章」三四二に詩あり。(公的な曲水宴の復活)

◎同年三月 「賦春夜桜花応製」(菅家文章三四四・川口久雄氏注)

◎同六年 「有勅、賜視上巳桜花之詩」(菅家文章三七七・川口氏注)

◎同七年二月 公宴。「賦春翫桜花之詩」(日本紀略) ※「菅家文章」三八四「春惜桜花応製」はこの時のものか。川口、渡辺秀夫両氏

◎同七年三月一二日 公宴。「月夜翫桜花為題」(日本紀略) ※「菅家文章」三八五

◎寛平年間 寛平御ときさくらのえんありける日、あめのふりはべりおければ

春さめの花のえだよりながれこば猶こそぬれめのになにかくれむ（後撰集・一一〇、敏行集・二二）

前掲神谷氏は、桜の詩の表現に桃の表現が通底していることを指摘されたが、この年表からもわかるとおり、桜詩が公的な場所から消える最後が、曲水宴での詩である。そして、曲水宴が復活した後、再び、公宴で桜詩が詠まれるようになる。断言はできないが、桜詩と曲水宴に何等かの関係が認められそうである。曲水宴では通常桃が詠まれる事を考慮に入れば、こういったところからも、桃と桜が通底している、といえるだろう。

- (14) 金子彦二郎氏『増補平安時代と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇』（芸林舎）、渡辺秀夫氏『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社）、後藤氏前掲論文等

- (15) 和歌の類型性に関しては、鈴木日出夫氏『古代和歌史論』（東京大学出版会）序章に多く論じられている。無常歌も、同じように、類型化されていたのだろう。

- (16) 森野宗明氏校注『伊勢物語』（講談社文庫）補注に指摘がある。

- (17) 山口博氏『王朝歌壇の研究 恒武仁明光孝朝篇』（桜楓社）

- (18) 新大系脚注に「代白頭吟」の詩想の影響も述べている。そういう意味でも漢詩文の落花意識の基盤の浸透が知れる。

- (19) 片桐洋一氏訳注『全対訳日本古典新書古今和歌集』（創

英社）

使用テキスト

万葉集

勅撰集

性霊集・文華秀麗集・菅家文章・伊勢物語

凌雲集

雑言奉和

白氏文集

樂府詩集

その他は、全唐詩（中華書局）、群書類従（続群書類従完成会）等を用いた

付記

本稿は、平成三年度大阪大学文学部卒業論文をもとにしたものである。神谷かをる氏「色も香もさくらめど―古今集の「桜」と漢詩文―」は、扱う題材なども共通しているのだが、卒業論文提出後に披見したため、本論でも十分に参照できていない。極力注に加えておいた。

（たきがわ・こうじ 本学大学院博士前期課程）